氏　　名	中井信介
学位（専攻分野）	博士（学術）
学 位 記 番 号	総研大甲第 1177 号
学位授与の日付	平成２０年３月１９日
学位授与の要件	先導科学研究科　生命体科学専攻 学位規則第６条第１項該当
学 位 論 文 題 目	タイ北部におけるモン族の豚飼養に関する環境人類学的研究
論 文 審 査 委 員	主　査　准教授　本郷　一美 教授　颯田　葉子 客員教授　秋道　智彌 教授　池谷　和信 教授　馬場　雄司（京都文教大学）

論文内容の要旨

家畜飼養を対象にした環境人類学的研究は、主として牛やラクダや羊などの家畜種の飼養を生業の中心とする牧畜民の民族誌的研究が蓄積されてきた。そこでは、放牧地での生態や家畜の管理技術や生産や消費の形態などが注目されてきた。その一方で、農耕民を対象にした研究では、焼畑や水田稲作などの経済的に重要な生業が注目されるあまりに、豚や鶏などの家畜飼養の研究が軽視されてきた。一部で行われてきた先行研究からは、パプアニューギニア高地の農耕社会では、儀礼による豚の大量屠殺が生態システムを調整する役割を果たしていることや、中国の福建省の農民の豚飼養ではすべてが商品として売却されており、その生殖管理の方法や肉の流通が明らかにされている。

本論文では、これまで豚飼養に関わる基本資料のほとんどなかったタイ北部の焼畑農耕社会（モン族）に注目して、そこでの豚飼養活動を環境人類学の視角から把握することを目的とした。具体的には、各家レベルを対象にして、豚への給与飼料の実態、生殖に関わる豚の管理技術、豚の生産と消費の形態を明らかにした。あわせて、本論文の成果をパプアニューギニアや中国における豚飼養の事例と比較することから、モン族の豚に関わる飼養文化の特性を指摘した。

本論文は全6章から構成される。以下に、各章の要旨を述べる。

第1章では、とりわけ豚飼養に注目して、これまでの家畜飼養に関する環境人類学的研究を概観した。例えば、パプアニューギニアでは、豚は放し飼いであり、高地と低地では給与される飼料や生殖管理の地域的違いが明らかにされ、高地では大量屠殺をする集団がいることが知られている。しかしながら、各家レベルでの実態や差異は把握されていない。筆者は、2005年5月～2007年1月にかけて、のべ13ヶ月間にわたって現地調査を行った。とくに調査村内の17戸（家番号1～17）を代表の調査集団として選び、豚飼養について精査した。調査村では、焼畑での陸稲とトウモロコシの栽培が行われ、主な現金収入はトウモロコシの販売により得ている。調査村では、改良品種の豚は飼養されず、飼養される在来品種の豚は改良品種と比較して小型で生育速度が遅く、形態的には黒色の毛、小さい耳が特徴となっている。豚の飼養率は86%（77戸中65戸）で、平均4.1頭を飼養していた。

第2章では豚の飼養技術について明らかにした。豚は「小屋」や「囲い」で舎飼するが、村内を自由に歩き回る様子も散見され、「放し飼い」ではない「ゆるやかな舎飼い」により飼養されていた。豚飼料は、野生バナナや野草などの自然植物、およびトウモロコシ種子や米ぬかなどの農耕産物から成る自給的な飼料を、季節により変化させて給与していた。なかでも野生および栽培バナナの葉や茎は飼料全体のなかで約4割の重量を占めていた。

第3章では、①豚の出産頭数、②出産可能な雌と繁殖雄の割合、③雄子の去勢割合と未去勢雄（繁殖雄）の割合、④繁殖雄の選択理由およびその所有者の特性、⑤交配に利用した繁殖雄の貸し借り関係などから、各家レベルの豚の生産実態を明らかにした。①豚の出産は代表集団の約6割の家においてみられ、その数は1戸あたり年間に約5.4頭（約4.5頭が離乳時まで生き残る）を示した。②調査集団内の豚総数のなかで交配利用可能な雌（1歳以上）は約29%、繁殖雄（1歳以上）は約3%を占めていた。③出産された46頭の雄子のうち、5頭（11%）は去勢前に死亡し、39頭（85%）が去勢され、残り2頭（4%）が未去勢で繁殖雄とされた。④繁殖雄は、生態的特長と形態的特長により選択されて飼養されており、その所有は権力者に限らなかった。⑤豚の交配は「ゆるやかな舎飼い」であるために人為交配と非人為交配が行われていた。そして人為交配は親族間や地縁間での繁殖雄の貸し借りにより行われた。また交配管理は各家により異なり、雄イノシシを利用した交配も行われた。

第4章では、①豚の屠殺による消費頭数、その目的、屠殺した豚の由来、また②入手される豚の頭数、入手方法、入手先の属性について、各家レベルの豚の消費実態を明らかにした。①豚の屠殺は約9割の家において行い、1戸あたり年間に約2.5頭を屠殺し消費した。そして屠殺の目的は、約8割が宗教行事（祖先崇拝、正月、婚礼など）の際に供犠として消費する一方で、残りの約2割は親族の訪問や子供の進級などの非宗教行事を契機にして自家消費していた。また両者とも、屠殺後に宴会で親族を中心として肉・皮ともすべて共食されていた点では共通していた。さらに消費した豚の由来は、屠殺する豚の約6割は自家で出産したものであり、のこりの約4割（このうち1頭は改良品種）は他家から入手されたものだった。②入手された豚の頭数は37頭であり、そのうち25頭（約7割）が有償で、残りの12頭が無償で入手された。また、入手先の属性をみると、親族から20頭（村内15頭、村外5頭）、親族以外が17頭（村内5頭、村外12頭）に分けられた。さらに、入手された豚の品種をみると、改良品種の入手は1頭であり、それ以外は在来品種であった。

第5章では各家レベルでの生産と消費の動態的関係の分析を行い、各家別の豚飼養形態は4つに分類できた。自家で豚の生産を行い消費する「生産・消費」型が約6割と多く、自家で豚の生産は行わないが肥育を行い消費する「肥育・消費」型が約3割を占めた。また、自家での豚の生産および肥育は行わないが取引により豚を入手し消費する「消費特化」型、および自家での豚の飼養を行わず消費もしない「非消費」型は、それぞれ約1割未満であった。

第6章では、これまで明らかにされたモン族の豚飼養活動について各家レベルでの実態から、モン族の豚飼養文化の特性について考察した。まず、豚の生産には飼料の給与が不可欠であり、各家には野生・栽培バナナを中心とする飼料の給与システムが存在しており、外部から購入される配合飼料は存在しない。これは、各家が調査村のなかで周辺の自然資源や農耕産物を利用しながら地域システムを維持してきたことを示唆する。

その一方で、各家レベルの生産に関わる豚の管理技術に注目すると、血縁や地縁関係などの社会関係を利用しての村内で完結した繁殖雄の貸し借りが認められた。また、豚飼養をする家では、主に宗教行事と密接に関与した自家消費が行われ、その他に親族への無償提供や販売もみられた。上述した「生産・消費」型と「肥育・消費」型という2つの豚飼養形態では、消費を考慮した飼養が展開されていたが、両者は村内での飼料の供給では共通しているが、後者では豚の生産が行われていない。この2つの分類型については、何らかの理由により、前者から後者に移行したと考えられる。理由の一つとしては、近年の調査村をとりまく道路状況や村人の所有する車両の増加などによって外部の豚の入手が容易になったことが挙げられる。しかし、その豚の大部分は在来品種であり、改良品種は1頭のみであり、それは消費するが飼養するにはいたっていない。この背景には、改良品種の飼養には配合飼料が必要であるとの調査村民の考えのほか、数多くの理由が存在すると考えられる。

最後に、本論文の成果をパプアニューギニア高地や中国福建省における豚飼養の事例と比較することから、モン族の豚飼養の特性を指摘すると次のようになろう。モン族の豚飼養は、パプアニューギニアと共通し、村内の地域の生態資源を利用した自給的な生業であると結論づけられる。この点では、商業生産を目的とする中国のものと異なる。また、本事例とパプアニューギニアの豚の消費を比較すると、前者では集団を挙げての儀礼による大規模な消費ではなく、祖先崇拝の儀礼の機会などで、近い親族の間での小規模な消費が行われていた。冒頭で述べたように、本論文は、これまで豚飼養に関わる基本資料のほとんどなかったタイ北部の焼畑農耕社会（モン族）の豚飼養に関する詳細な事例を提示しており、これまで蓄積のみられたパプアニューギニアの農耕社会とは異なる豚飼養の文化の実像を提示することができた。

論文の審査結果の要旨

豚は、東アジア・東南アジアからオセアニア地域に暮らす農民にとって、食肉用、交換用、儀礼用として欠かせない家畜であるといわれる。しかし、これまでの豚飼養を対象にした人類学的研究では、主にパプアニューギニアのものが注目されてきた。また、その研究枠組みでは、外部社会との関係をあまり重視することなく、集落内における豚の位置づけが議論されてきた。本博士論文は、タイ北部におけるモン族の村での豚飼養を対象にして、約 13 ヵ月間の現地調査による環境人類学的研究である。具体的には、豚飼養を成立させている餌の状況、生殖管理や飼養技術などの生産面、儀礼の際に用いられることの多い消費面の実態を詳細に把握することが目的とされる。論文は、序論につづいて、４つの章が本論を構成する。

まず序論では、生態人類学や畜産学などにおける農民の豚飼養を対象にした研究が展望され、世帯レベルでの飼養の実態に関する先行研究が乏しいことが指摘される。また、豚飼養を、技術、生産、消費という３つの要素から把握するという研究枠組みが示される。

第 2 章の「豚の飼養技術」では、豚の行動管理と餌の確保の実際が定量的データをもとに記述・分析される。豚は小屋や囲いで舎飼いされているが集落内を歩き回る豚もいること、豚飼料では多くの飼料が多様に組み合わさるなかでバナナの葉や茎が約４割を占めていることが明らかにされた。

第３章の「豚の生産」では、１戸当たり年間に約 5.4 頭を出産しており、出産時期は特定の集中する時期がないこと、繁殖雄による交配をみると、管理された人為交配と管理されていない非人為交配が行われていて、なかにはイノシシを利用した交配も行われているという注目に値する指摘がなされている。さらに繁殖雄の所有が村の中の特定の階級の世帯に限られていないという指摘も興味深い。

第４章の「豚の消費」では、１戸当たり年間に約 2.5 頭の豚が屠殺されていたこと、屠殺目的の約 78 パーセントが儀礼によるものであり、屠殺された豚の 35 パーセントは自家で生産された豚ではなかった点も興味深い事実である。

第 5 章の「豚の生産・消費システム」では、上述してきた知見をふまえて、自家で豚の生産を行い消費する「生産・消費」、肥育のみ行い消費する「肥育・消費」、消費のみの「消費特化」、そして「非消費」という４つの豚飼養タイプが分類される。

以上のように、本博士論文は、モン族の豚飼養の実態を現地調査によって丹念に記述・分析したものであり、これまで既存の研究の乏しい地域に新たな資料を提示し、これらの記述・分析の多くにより、モン族の豚飼養がパプアニューギニアのそれとは異なる実像を示した意義は大きいといえる。その一方で、モン族の豚飼養の歴史的変化はあまり考慮されておらず、様々な儀礼と密接にかかわる焼畑農耕民の家畜飼養の特徴を示す事ができれば、さらに本研究は発展すると期待される。以上の様に本研究で示されたモン族のブタ飼養に関する定量的・定性的な資料は、牧畜民に偏在した家畜飼養の環境人類学的研究にとって貴重なものであり、高い学術的な意義を持っている。したがって、審査委員会は本論文が博士（学術）の学位を授与するのに値するものと判断した。